水害のないまち・安全安心な水の確保

多目的ダム「当別ダム」への願い

私たちの生活と切り離すことができない水。水は生命の源であると同時に、時に洪水を引き起こし、私たちの生活に多大な被害を与えることもあります。

当別町には、石狩川と当別川のほかに148もの中小河川があり、洪水と水害の歴史をたどってきました。

その歴史を振り返りながら、今一度、当別ダムについて考えてみましょう。

災害の記録

昭和36年から平成13年までに、台風や集中豪雨による川の氾濫は26回を数えます。3年に2回の割合で悲惨な被害をこうむってきたことになります。

昭和36年8月の町広報では、7月に起きた豪雨の被害をこう伝えています。

7月24日から26日にかけて降り始めた豪雨による当別川の氾濫は、規模も大きく町内各地に開基以来の被害をもたらす大水害になりました。雨量は232ミリに達し、当別川はいつもの3～5倍の川幅と変わり、ついに堤防を越え、街を押し流すように氾濫しました。田や畑は泥の海の下に埋まり・・・

と全町が水害に見舞われた様子と、死者や行方不明者が出る人的被害や住宅や施設、農作物など総額5億円もの被害があったと記しています。

また、当別を襲った大水害で最も記憶に新しいのは、昭和56年8月に2回続いた台風の被害があります。当時の9月町広報では「無情の308ミリ」と題が付けられ、

8月3日以来降り続いた豪雨は、平野部で308ミリ（札幌土現当別出張所調べ）、青山ダムで563ミリ（当別土地改良区調べ）という観測史上例のない大雨をもたらし、昭和50年の災害を大きく上回る傷跡を残しました。・・・通行不能となる路線が続出し、川下左岸地区に避難命令を発令するなど避難した人たち317名が公民館ほか9施設で不安な夜を過ごしました。

昭和56年の水害の様子　旧23線橋付近

と記され、被害額は45億円、その6割が農業関係だったと伝えています。

このような洪水を繰り返す中で、町は当別川の抜本的な治水対策を北海道知事に陳情し続けて30年が経ちます。この間、町でも排水対策特別事業や河川整備をはじめ、内排水機場の設置など各種対策のために270億円以上ものお金をつぎ込んで洪水対策に取り組んできました。そんな歴史の中で、当別ダムの完成は「抜本的な治水対策」を期待できるものです。

水の確保

水道用水

現在、町の上水道は、町営東町団地の東側を流れる当別川の表流水を取水し、元町浄水場で浄化処理後、町内のほとんどの世帯へ給水しています。

しかし、浄水場の老朽化が激しく、町単独での建設には30億円を超える費用を要すると見込まれますが、当別ダムと共に浄水場を建設すると14億円程度の費用負担で済みます。

今現在も、町が有する水利権だけでは水量が足りず、不足部分は、ダム完成を担保に暫定的に認めてもらっています（暫定水利権）。万が一ダム建設が凍結されると、目の前に川が流れているにもかかわらず、その水を飲用には使えない状況になります。

町が札幌市、小樽市、石狩市とともに構成する「石狩西部広域水道事業団」では、社会情勢の変化の中で、事業の再評価が行われ、計画用水供給量の見直しがされましたが、当別ダム建設と共に、浄水場や送水管などの水道施設が整備されることで、今後、安全で安定した水道水を供給することができます。

老朽化が激しい浄水場

かんがい用水

当別の稲作中心の農業には、かんがい用水の確保が重要です。当別川の洪水被害に悩まされる反面、河川の流量が不安定なため用水不足を生じることも度々あります。

さらに、一度用水として使った水を下流域の耕地に還元利用するための多数の揚水施設に多大な維持管理費が費やされています。

国営かんがい排水事業もほぼ終了し、ダムの完成が待たれるところです。

将来に向かって**水害のないまちと安心安全な水を確保する**ために、当別ダムの早期完成が待たれます。

町民緊急大会開催

町民約1,100人が集結し、当別ダム早期完成を求める町民緊急大会が、11月23日に白樺コミセンで開催されました。